

小林正人 インタビュー

2016年8月 鞆の浦のアトリエにて

ドアがあそこにあるじゃない。

結局ここから俺は絵が始まってるという感じ。

まだ見えてないけどさ、助走みたいな感じかな。

それでアトリエの中にある絵に向かう訳だけど。

ま、開けたら見えるからさ。

で、見えてないときに、絵のことは考えているじゃない。

同時にやっぱり、こういう空とかさ 海とか、全部くる訳じゃない。緑とか。

そういう中でなんか混ざるんだろうね。何かが。

それで、行くぞ！っていう時に、ばあって入って行って、

それで、やるわけよ。

まだ今の段階だったらさ、

やっぱり、すこし遅らせてっていうか、

これですぐ形きめるとき、それでやっぱり縛られるから。

そうなる前にちょっとよけてっていうか、よけてずらしとく。

それでまだやって行って。

そうしていろんな角度からやっていくと、最後はあっという間にできあがる。

うん、やっぱりまだ動くっていうか。

結局、生きてるようにやりたいんだよね。

で、生きてるとっていうのは、どっかが先にできたらさ、

それってなんでもないじゃない。花でも何でも。

どっかが出来ると まあそれで終わる。

その時(全部)出来てればいいけどね。

要するにおれの理想郷っていうのはさ、

美しいものとね、アートっていうのを何かっていえばさ、

beautifulなものを創る、beautifulなことをする。

Making or expression of what is beautiful.

beautifulなものを創る、するって言うても、

beautifulなものの中にはさ、クソみたいなものがあるじゃない。必ずさ。

で、それと紙一重っていうか。

だいたいそういう理想の世界みたいなものっていうのは、すごく美しいものだけど、

クソみたいな、ひどいものと紙一重のボーダー。

今日オレがやってたことも、オレにしてみればそうなんだよう。

Beautifulなものを創りたいわけだよね。

だけど、それは同時にいろんな人間の、汚いものも含んだ、

非道いクソみたいなものも入っているっていうか。

そういうボーダーの辺のところに、

オレの理想とする絵の世界っていうのがあって。

そういういろんな絵の..

りんごであれ、空であれ、ヌードであれ、星であれ、

床置きの絵も、壁に架ける絵もみんな、絵の星の家族が住んでいるみたいな家があって、

そこに架かっているっていうか置いてある。

そういう、絵の家族が住んでいる家みたいなものが、オレの頭の中にある。

そこに架けられる絵を創っているっていうかな。

その絵の星の家族が住んでいる家っていうか、小屋みたいなものがさ、美しいものとひど

いもののボーダーの辺りに建っていて、その原っぱに馬が居たっていう感じなんだよね。

そう、やっぱり美しいものを創りたいんだよ。

その時自分に、たとえば今日なんかもさ、制作してる時に多分なんとなく頭の中でさ、呪文みたいに言っているのは。

「もっとひどく、もっとひどく」

言葉にするんだったらね。

そういうほうが近いと思う。

美ってというか、そういうのって、守りに入っちゃうと絶対届かなくなっちゃうよね。

離れて行くってというかさ。

おれもやっぱり、ともすると守りに入りたいんだよ。

ちょっとうまくいったらさ。そこを崩さないようにしてとっておきたいし。

ちょっとうまくいったらすぐそこで、その方向で押さえないよ。止めてさ。

だけどそうすると、本当に掴みたいものには届かないっていう事がわかるから、遅らせるってというか、そうするんだけど、むずかしいよ。

だから紙一重だと思うんだよ。

美、酷いっていうのはさ。

生きるっていうのはそういう事のような気がするし。

(了)